

# ソシュールとレヴィ＝ストロース、 ジークフリートとオイディプース

Saussure et Lévi-Strauss, Siegfried et Œdipe

金澤忠信

## 要 旨

ソシュールの伝説・神話研究の根本原理とは、伝説は歴史にもとづいており、叙事詩は細部にいたるまで歴史的でありうる、というものである。彼は諸細部の一致点・不一致点の一覧表を作り、物語の原初形態を再構成することを通じて、過去に起こった現実の出来事に近接しようとする。1990年代にキム・スンドがソシュールとレヴィ＝ストロースの神話学を比較し、両者に方法論上の共通点を見た。キムの最終的なねらいは、ソシュールの伝説・神話研究を記号学に回収しつつ、共時言語学に終始したと批判されるソシュールを神話の根底にある通時的構造の研究者として救うことにあった。だが実際、神話の構造分析を通じて神話的思考と科学的思考に相同性を認め、延いては人間精神の普遍性を立証しようとするレヴィ＝ストロースの神話学と、構造・法則・不可思議なもの・社会的通念・主観的解釈などを排して歴史的事実を再構成しようとするソシュールの伝説・神話研究とは、主旨も方法論もまったく異なる。

## キーワード

ソシュール、レヴィ＝ストロース、伝説・神話研究、  
神話学、一般言語学、記号学、構造主義

## 1. ソシュール神話学概説

フェルディナン・ド・ソシュール [Ferdinand de SAUSSURE (1857-1913)] は、手稿<sup>1)</sup>に稀に記されている日付から判断すると、少なくとも1903年か

ら1910年にかけて伝説・神話研究を行っていた。本格的に伝説・神話研究を始めて間もない1904年頃には研究の成果として書物の出版を計画していた形跡があるが、最終的に出版にはいたっていない<sup>2)</sup>。この「書物の草稿」も含め、伝説・神話研究の対象はギリシア・ローマ神話、ゲルマン英雄伝説、トリスタン伝説などで、手稿の紙面の大半は、伝説・神話の細部（登場人物の特徴・行為、登場人物どうしの関係、装身具・装飾品、物語の本筋とはあまり関係のないエピソード、物語が展開する時間の長さや継起順、物語の舞台となっている場所の地理関係、等々）の分析と、いくつかの伝説・神話間あるいは諸異本間でのそれら細部の比較によって占められている。これ以外に、分量としてはかなり少ないものの、研究の基本方針あるいは方法論が記されている。

ソシュールの伝説・神話研究の前提となっている根本原理とは、「<sup>イストワール</sup>歴史にもとづく伝説があった」ということ、より正確には、「アプリアリに叙事詩は、細部にいたるまで、歴史的であるあらゆる<sup>チャンス</sup>機会をもつ」ということであり、「そうであることを証明し、細部を確認することが問題となる」<sup>3)</sup>。下で再び取り上げるが、ソシュールの最終的な研究対象および方法論をひとまず確認しておく、彼は「<sup>イストワール</sup>歴史」が「伝説」になつたあとの「伝説」の伝承・変遷になんらかの法則性・規則性（たとえば言説流通の潜在的・無意識的構造）を見出そうとしたのではなく、むしろ「歴史」が「伝説」になる前の、過去に現実起こった出来事ないし事実そのものを再構成しようとする。具体的な読解の対象は現存する文献資料だが、ソシュールはそれらの文献資料（伝説・神話の<sup>サイクル</sup>作品群および同一作品群に属する諸異本）を比較対照し、細部の一致点・不一致点の一覧表を作成する。

ひとつの叙事詩的説話が細部に至るまで現実の出来事を再現していたかもしれないという可能性を、こうもすぐに排除するとは、なんと

奇妙な方法か！

……（ホメーロスとシュリーマンを思い起こしてみよう）

唯一の方法とは、逆に各人が、一定の方向性で気づきえた叙事詩的・歴史的一致点を列挙し、馬鹿にされるのを怖れずに、一致の目録を究め尽くすことである<sup>4)</sup>。

ここでソシュールはハインリヒ・シュリーマン〔Heinrich SCHLIEMANN (1822-1890)〕を引き合いに出しているが、シュリーマンが古代遺跡の発掘作業を行っていた時期（1870-1880年代）はソシュールのドイツ留学時代（ライプツィヒ1876-1880、途中ベルリン1878-1879）と重なっている。シュリーマンは1873年にトロイア遺跡で「プリアモスの財宝」を発見したと報告し、そのことによって古代史研究は一気に加速した。シュリーマンはそれらの財宝をドイツに寄贈した功績により、1881年に「ベルリン名誉市民」の称号を獲得している。おそらくソシュールは、シュリーマンによる遺跡発掘の報告書やそれについて報じている新聞記事などを通じて、急速に進展しつつある同時代の歴史研究に関心を寄せていたはずである。それはもちろん伝説・神話研究にも少なからぬ影響を及ぼしたと考えられる。

叙事詩の「細部」に「現実の出来事」の痕跡を見出すにあたり、「作者あるいは語部<sup>かなりべ</sup>」は「彼よりも前の時代に語られていたことをできるかぎり踏襲しようとする意図があることを、特殊な場合を除いて、ゆめゆめ疎かにしてはならない<sup>5)</sup>」というのが、ソシュールの基本的な姿勢である。もちろん叙事詩には「神話的で不可思議な要素〔éléments mythiques et merveilleux〕<sup>6)</sup>」が混ざり込んでいて、「歴史性の程度〔le degré d'historicité〕」を評価するのが困難になっている。しかしながら、『ニーベルンゲンの歌』をはじめとする「ジークフリート伝説」の「原初の緯糸<sup>よこいと</sup>〔la trame primitive〕」から「不可思議な挿話〔épisode merveilleux〕」を取り除くことは可能であ

り、しかもそれは「ありきたりな不可思議なもの〔un merveilleux banal〕<sup>キイクル</sup>」であって、当該伝説の作品群に特徴的なものではない<sup>7)</sup>。たとえば、「王家の宝物」がそれを手にした者すべてを破滅させる。これは、英雄ゆかりのヴォルスング族に固有の「運命」などではなく、「メロヴィング叙事詩」と呼ばれるもののなかで繰り返し取りあげられた「ありきたりな」テーマであり、メロヴィング朝時代に通用していた「王家の宝物を持つと自ら破滅を呼ぶ」という「格言」ないし「常套句」にすぎない。いずれにしても、ソシュールの伝説・神話研究において、そうした当時の社会のなかで流通していた意義や教訓のようなものを表現する「神話的・詩的発明」は削ぎ落とされ、それでもなお残るものが叙事詩の原初形態であり、延いては伝説・神話の起源としての「現実の出来事」ということになる。

「現実の出来事」あるいは「歴史的事実」に可能なかぎり近接する一環で、ソシュールはヴィルヘルム・ミュラー〔Wilhelm MÜLLER (1820-1890)〕をはじめとする「歴史の象徴論」を批判している。「歴史の象徴論」というのは、たとえば「英雄たちによる結婚——あるいは王妃の奪取——は一国による領地の象徴的獲得を表している」<sup>8)</sup>といった類のものだ。ソシュールは、そもそも叙事詩は「歴史的事実」を象徴的に表しているという説を斥ける。

そうして、実際その行為は、最終的に象徴的なものとして通用しうようになる。——象徴的解釈が、その出来事の諸異本および諸表現の継承を見ている批評家のなかにしかないことに鑑みれば、その行為を象徴的なものと呼ぶことは、やはり誤りということになろうか。朗唱されるものを前任者からそのままのかたちで受け継ぐ吟遊詩人<sup>ラフソードス</sup>と同様に、それを直接聴く者にとっては、ハーゲンがライン川に宝物を投げ捨てたのはまぎれもない真実であり、したがってそこには、最初に

いかなる象徴もなかったように、最終的にいかなる象徴もない。

時間が流れたあとに、割合が減少した、あるいは出来事が増加した、  
という言い方は可能である。これはすなわち、変形されながら幾度と  
なく朗唱されたあとに、ということであって、任意の瞬間に象徴化さ  
れたあとに、ということではない。

象徴的なものとして否定できないと言われる形態、**宝物**。ただし、  
メロヴィング朝の時代には、純粹にそのまま宝物と見られていて、少  
しも象徴的なものではなかった<sup>9)</sup>。

ソシュールによれば、叙事詩には端的に「象徴」はない。諸異本を比較  
対照する現代の批評家の頭のなかに「象徴的解釈」があるだけである。原  
初の叙事詩あるいは叙事詩の起源にあったと想定される年代記の作者や叙  
事詩を語り継ぐ吟遊詩人は、説話のなかの「行為」や「出来事」に象徴的  
意味を意図的に込めたわけではない。無意識的に込めた、とすれば精神分  
析的解釈になるわけだが<sup>10)</sup>、それはソシュールの伝説・神話研究が目指す  
ところではない。ソシュールが叙事詩から引き出そうとするのは、あくま  
で「歴史的事実」の痕跡のみである。「宝物」も、「投げ捨てた」という行  
為も、何かを象徴的に表しているのではなく、「現実の出来事」として、ラ  
イン川に宝物が投げ捨てられた、ということになる。

#### 『ニーベルンゲンの歌』における宝物の役割〈特徴〉

(私の見立てでは)ニーベルンゲンのブルグント伝説の諸細部につい  
てと同様全体について、またそのすべての諸細部について、ノルド異  
本が宝物に与える特定の色にしたがって〈のせいで〉人々の精神に根  
づいた〈ニーベルンゲンにおける宝物の運命的役割という〉考えほど、  
誤った〈不正確な〉〈不当な〉判断を下させるのに貢献したものはない。

ヴァーグナーのラインの黄金 [Rheingold de Wagner] の、黄金の宝物の事件の中心的で神話的な重要性 [ ] 〈ドイツでは考案している、考案するために苦労した〉 (「宝物の事件」は良い表現)

メロヴィング朝時代の〈王家の〉宝物

つねに二つのもの：1. 土地〈領土〉。2. 王家の宝物。

『ニーベルングの歌』の〈二箇所を除いて〉どこでも、この宝物は〈たしかに〉係争の主題という特徴あるいは一部の領土に対する所有欲と完全に同一視できる〈人間界の〉強欲の対象という特徴を越えない。クリームヒルトが不満を言う……等ときを除いてどこでも 例。

これらすべては絶対に、メロヴィング朝時代に一つの家族の成員たちのあいだで繰り広げられた歴史的係争と同調しており、超人間的、衝動的、あるいは例外的な特徴をいささかも呈してはいない<sup>11)</sup>。

これはソシュールがリヒャルト・ヴァーグナー [Richard WAGNER (1813-1883)] に言及している数少ない手稿の一つである。ちなみに、『ニーベルングの指環』全4部初演は、ソシュールがライプツィヒ大学に留学する直前の1876年8月である。

当該の手稿はところどころ削除・加筆が施され、不完全な文章にとどまっているので、いくらか補足しておく、おそらくソシュールが言いたいのは、北欧の「ジークフリート伝説」では「宝物」の「色」が「金」であるという、「ブルグント伝説」にはなかった要素が付け加わり、それが19世紀のドイツではロマン主義的に解釈され、「ラインの黄金」に「運命的役割 [rôle fatal]」が付与された、ということだろう。「『宝物の事件』は良い表現 [« L'affaire du trésor » est bonne expr [ession].]」という文言は、実際には枠で囲われて注のようなかたちになっている。伝説・神話研究の時期 (1903-1910) に鑑みると、「ドレフュス事件 [l'affaire Dreyfus]」など当時の

時事問題をあてこすっているのかもしれない<sup>12)</sup>。いずれにしても、「宝物」に「運命的役割」があると考えるのは、「不当な判断」を招くだけである。ソシユールの論理にしたがえば、メロヴィング朝時代において、「王家の宝物」は文字通り「宝物」であり、王族の欲望・係争の対象であって、原初の叙事詩においては、「超人間的」、「神話的」な特徴をもってはいなかった。

伝説・神話から「神話的で不可思議な要素」を削ぎ落とすための基準、というよりむしろ「現実の出来事」の痕跡を残すための基準として、「詩趣喪失〔*dépoétisation*〕」あるいは「装飾欠如〔*dépouillement*〕」<sup>13)</sup>のというのがあり、これがソシユール神話学の独自性をなしている。この基準にしたがうと、たとえばジークフリートが狩りの最中に殺される異本と寝室で殺される異本とでは、後者の成立年代のほうが古いと考えられる。なぜなら、高貴な生まれの英雄が寝室で休んでいる間に暗殺されるというのは、偉大であるべき叙事詩と矛盾するからである。英雄伝説に、英雄らしからぬ死の場面を、あとからわざわざ付け加えたとは考えにくい。してみると、寝室での暗殺のほうが当初からあった場面で、狩りの最中の暗殺は後代の改変、ということになる。ソシユールは、想定されうる詩の原初形態として、英雄（のモデルになった歴史上の人物）が狩りに出ている間に共謀が成立し、帰宅してからワインを飲んで酔っ払い、ベッドで寝ていたところを襲われた、というふうに再構築している。「狩り」は「歴史」<sup>イストワール</sup>においては付随的な状況だったわけだが、「物語」<sup>イストワール</sup>にとって本質的な場面になるように、その価値を反転させた、ということになる。ただしソシユールは「分析にそのような再構築を極力混ぜないようにしている」とも述べており、単純素朴に過去の事実を再現しようとしているわけではないことにも注意しておく必要がある<sup>14)</sup>。

## 2. キムによるソシュールとレヴィ＝ストロースの比較

キム・スンド〔KIM Sungdo〕は「神話学者ソシュールはなおソシュールなのか?——ソシュール神話学についての解釈の試論」<sup>15)</sup>の結論部分で、ソシュールとクロード・レヴィ＝ストロース〔Claude LÉVI-STRAUSS (1908-2009)〕をかなり大雑把な仕方と比較している。

キムによれば、両者の方法論の定義を比較すると、「実証主義的比較主義〔le comparativisme positiviste)〕に対する歴史的・構造的の方法の位置づけに一致点が垣間見えてくる。ソシュールの神話学は、研究対象を発生的につながりのあるいくつかの神話的物語に限定する「通時的計画」<sup>プロジェ</sup>である点でレヴィ＝ストロースの神話学とは異なるのだが、それでもやはり両者は同様の基準を採用している。キムはその例証として、『生のもとと火を通したものの』の「序曲」から次の一節を引用する。

あるひとつの神話から出発する。その神話はあるひとつの社会に伝わるものである。その神話を分析するには、まず民族誌にたより、それから同じ社会に伝わる他の神話の助けを借りる。調査の範囲を少しでも広げてゆくために、近隣の社会の他の神話へと移ってゆくが、かならずその社会の民族誌の中にその神話を位置づける。少しずつさらに遠い社会へと移るが、それは、それらの社会のあいだに歴史的あるいは地理的な現実のつながりがあったのが事実であるか、あったとする仮定が妥当である場合に限る<sup>16)</sup>。

おそらくキムは、「構造人類学の創設者」の共時的計画<sup>プロジェ</sup>においては「歴史的あるいは地理的な現実のつながり」が認められる場合に限り調査範囲を広げるという点に、ソシュールとの方法論上の共通点を見ている。すなわ

ち、少なくとも方法論的には、(キムの想定する) 神話研究のソシュールの図式「神話的物語 = 歴史 + 物語 [Récit mythique = Histoire + récit]」と、レヴィ＝ストロースによる神話の一般モデルとは対立しない。ただし、この方法論上の共通点は、両者の「抽象化レベルの階層 [hiérarchies des niveaux d'abstraction]」の対立を際立たせるという。

キムの議論は錯綜していてわかりにくいので、補助線を引いておくと、レヴィ＝ストロースは『生のもとと火を通したもの』の「序曲」の冒頭で、特定の文化において明確に定義できる「生のもとと火を通したもの、新鮮なものと腐ったもの、湿ったものと焼いたもの」といった経験的区別が「概念の道具となり、さまざまな抽象的観念の抽出に使われ、さらにはその観念をつなぎ合わせて命題にする」<sup>17)</sup>、その仕方を示すと述べている。そうして人類学者は「この上もなく具体的なもの」から出発し、「わたしの実験室となる先住民の社会から借りてきたわずかな数の神話を使って」、「普遍的な」結果を導き出そうとする。レヴィ＝ストロースにおいては「あらゆる文化的現象を人間精神の構築物に帰着させようとする構造化の手続きが存在する」<sup>18)</sup>と述べたうえで、キムは今度は『生のもとと火を通したもの』の結末部から引用する。

それと同様に、あるマトリックスはある別のマトリックスしか指し示しておらず、ある神話はある別の神話しか指し示していない。互いに意味しあうこれらの意味が指し示す最終的なシニフィエは何かと問うたところで、そして結局は意味全体が何かを意味しなければならないのであるが、本書が提案する唯一の答えは、神話は精神を意味しているということである。精神が、自分自身もその一部である世界を使って神話を作り上げている。だから神話を編みだす精神によって神話が生み出されると同時に、神話によって、精神の構造にすでに書き込ま

れている世界像が生み出されるのである<sup>19)</sup>。

これについても補足しておく、レヴィ＝ストロースはやはり「序曲」で、諸神話を比較するにあたり、中央ブラジルのボロロ族の「コンゴウインコとその巣」を「基準神話」とするのだが、それはこの神話が他の神話よりも古いとか、単純であるとか、完璧であるからというわけではなく、この神話から出発するのは「たまたま」であり、「どの神話をとってよかった」と述べている。なぜならそれは、「基準神話」を含め、どの神話も「同じ社会とか近くや遠くの社会に伝わっているいくつかの神話を、ある程度変形したものにすぎない」<sup>20)</sup>からである。このように、レヴィ＝ストロースの神話学においては、あるひとつの神話は他のいくつかの神話を変形している、すなわち「グループ内で他の神話とは異なる位置を占めている」<sup>21)</sup>ということが重要であって、神話は「記号〔signe〕」として「体系〔système〕」内で他の神話＝記号と否定的差異〔*différence négative*〕（実定的差異〔*différence positive*〕ではなく）の関係にあり、相互に指し示し合うことで「意味」が生じている。むしろ、相互に「シニフィアン〔signifiant〕」として指し示し合うことでしか「意味」は生じない。日本語版では「意味」、「意味する」、「意味されるもの」と訳されているが、原語はそれぞれ« signification », « (se) signifiant », « signifié »であり、いずれも« signe »に関連した記号学の用語である。「最終的な意味されるもの〔ultime signifié〕」は、ソシュールの用語で言えば「究極のシニフィエ」となろうか。レヴィ＝ストロースにとって、神話が記号として意味する「究極のシニフィエ」とは「精神〔l'esprit〕」であり、構造人類学者は自らの神話研究を通じて、ヨーロッパ人と同様に南北アメリカの先住民にも抽象的観念によって思考する「精神」があることを立証しようとする。さらに付け加えるなら、レヴィ＝ストロースが1960年代に神話研究において「精神」を神話の「究極

のシニフィエ」にすることの「シニフィエ」とは、ヨーロッパ中心主義に対するプロテストだったと言えよう。

こうしたレヴィ＝ストロースの提起する記号学的あるいは構造主義的な議論が、ソシユールの手稿において明示的に出でこないのは、キムの指摘するとおりである。キムは、1990年代に、『ソシユール4』、すなわち『一般言語学講義』の言説を破壊した神話学者ソシユールがいるのか? という問いに、否と答える。「歴史比較言語学のソシユール」, 「一般言語学のソシユール」, 「アナグラムのソシユール」に加え、1970年代には「伝説・神話研究のソシユール」(これが「ソシユール4」にあたる)と、「ソシユール」は「多数化」し、それぞれの「ソシユール」のあいだの齟齬が指摘されるようになったのだが、キムからするとソシユールは「一人だけ」であり、紆余曲折しているように見える多様な研究活動の根底には「記号学的理念の統一性 [l'unité de l'idée sémiologique]」がある。

キム独自の解釈によれば、ソシユールの伝説・神話研究において、伝説は「歴史的基盤 [fond historique]」をもっており、そこからの歴史の伝説化および伝説の伝播・変化は偶発的なプロセスではなく、「基底構造 [structure sous-jacente]」あるいは「通時的構造 [structure diachronique]」に拠っている<sup>22)</sup>。この「通時的構造」に則った伝説の伝承には、大きく「削減・増幅・誤り [réduction, amplification et erreur]」という三つの様相があり、このプロセスはウラジーミル・プロップ [Vladimir PROPP (1895-1970)] の『昔話の形態学』における昔話<sup>コソト</sup>の変化図式に酷似しているという。

キムのソシユール解釈の根底には、ソシユールの伝説・神話研究を記号学に回収しつつ、さらに、「一般言語学」あるいは「共時言語学」に終始したと批判されるソシユールを「通時的構造」の発見に専念する「神話学者」として救おうとする意図があることは明らかである。ソシユールの研究全体には、その統一性を内側から正当化するような仮説が潜在的に含まれて

いる。したがって、神話研究の言説は『一般言語学講義』の言説と矛盾しない。これはソシュールの「擁護」であると同時に「乗り越え」でもあり、1990年代にはそれなりに意味（あるいは「シニフィエ」）があったと言えるかもしれない。

ソシュールが考察の対象としたのは、「歴史的基盤」をなす「歴史的出来事」以降の歴史の伝説化および伝説の伝播・変化だとキムは考えている。それはキムによる神話研究のソシュールの図式「神話レシの物語 = 歴史 + 物語レシ」に端的に表れている。しかし、ソシュールが探求しようとしたのは、上で見たように、あくまで「歴史的事実」そのもののほうである。伝説の変遷をたどるのは、歴史的变化の「法則」や「構造」を発見するためではなく、変化したものあるいは追加されたものを現存の伝説から差し引くためである。あえてキムの図式を引き合いに出すなら、「神話レシの物語 - 物語レシ = 歴史イストワール」ということになるのか。

「共時的構造」と「通時的構造」の違いはあれ、諸神話の根底にある「潜在的構造」を発見しようとする点でレヴィ＝ストロースとソシュールは共通しているとキムは見ている。それゆえ、ソシュールの手稿の内容を全体的に記述するには（記号学的・構造主義的な議論が明示的になされていない以上、行間に秘められた内容を深読みするしかない）、ゲルマン神話に関わる領域（ゲルマン民族の社会および歴史）についての人類学者・歴史家の究明が必要になる。もしそれがなければ、ソシュール神話学の総括を提示するのは絵空事〔chimérique〕になってしまうとキムは言う<sup>23)</sup>。だが、ソシュールの伝説・神話研究を無理やり記号学に回収して彼の思考の統一性を確証し、さらにソシュール理論の「乗り越え」のための梃子をソシュール自身から引き出そうとして、「通時的構造」という概念を捻出するやり方は、まさに「キマイラの〔chimérique〕」というほかない。

### 3. ジークフリートとオイディプス

キムのように二人の思想家の方法論上の共通点を見出すやり方ではなく、事実およびその経緯に則して、神話研究におけるソシュールとレヴィ＝ストロースの関係および相違について触れておく。

これまですでに幾度となく指摘されたことではあるが、あらためて確認しておく、レヴィ＝ストロースはソシュールの『一般言語学講義』から直接影響を受けたわけではなく、ロマーン・ヤーコブソン〔Roman JAKOBSON (1896-1982)〕の音韻論における「構造」の概念に着想を得て、構造人類学を創始・展開した。ヤーコブソンとの最初の出会いは1942-1943年に亡命先のアメリカ・ニューヨークで、「高等学術自由学院」での講義を興奮を覚えながら聞き、期せずして「構造言語学の啓示」を受けたという<sup>24)</sup>。

レヴィ＝ストロースは論文「言語学と人類学における構造分析」において、「革命的な変化」をもたらした音韻論の方法論について簡潔にまとめている。ただし当該箇所はニコライ・トゥルベツコイ〔Nikolai TROUBETZKOY (1890-1938)〕の音韻論に関する論文<sup>25)</sup>を参照している。

まず第一に、音韻論は意識的言語現象の研究からその無意識的な下部構造の研究へと移行する。それはまた項を独立した実体として扱うのを拒絶し、項と項との関係を分析の基礎とする。第三に、それは体系の概念を導入する。「現代の音韻論は音素がつねにある体系の要素であることを明言するにとどまらず、具体的な音素体系を明示してその構造を明らかにする」のである。最後に音韻論は一般的法則の発見を目的とする。これらの法則は時には帰納によって発見されるが、「時には論理的に演繹され、そのことがそれらに絶対的な性格を与える。」<sup>26)</sup>

ソシュールの『一般言語学講義』では、「無意識」も、そしてもちろん「下部構造」も、明確な概念として規定されているわけではない。『一般言語学講義』「序論」第7章およびそれに続く「付録」に音韻論の定義と原理に関する記述があるが<sup>27)</sup>、「音素体系」はソシュールの用語ではない。「項と項との関係」<sup>28)</sup>、「体系の概念」は、『一般言語学講義』にある。「ラングはすべての項が連帯している体系であって、そこでは、ある項の価値は、他の項が同時的に存在していることから生じてくる」<sup>28)</sup>。ただし、『一般言語学講義』における「項」とは、シニフィエとシニフィアンからなる<sup>シニフィエ</sup>記号のことであり、体系とはあくまで記号の体系であって、「音素体系」のことを指しているわけではない。

「神話の構造」<sup>29)</sup>では、留保つきではあるが<sup>30)</sup>、ソシュール言語学の基本概念の一つである「言語記号の恣意性」を評価し、自らの神話学に取り入れている。

「昔の哲学者たち」は各言語<sup>ラング</sup>においてそれぞれの音が特定の意味に結びつく内的必然性を探求した。それと同様に、昨今の神話学者も、音と意味との自然的親近性にもとづいて、たとえば「流音」的半母音はそれに対応する物質の状態（「液体、流動」）を表し、「開」母音は「大きい、重い、よく響く」といった特徴をもつ物の名に用いられると確信している。しかし実際には、同じ音であっても、他の言語では異なった意味と結びついている。すなわち、言語における音と意味との関係は恣意的である。「言語の意味的機能 [la fonction significative de la langue]」は、音自体に備わっているわけではなく、言語において音が互いに組み合わせられる仕方、音と音との関係のあり方によって規定される。ただしレヴィ＝ストロースは言語<sup>ラング</sup>と神話を単純に比較しているわけではなく、また、ソシュールの用語に依拠しながらも、独自の用語法を採用している。

レヴィ＝ストロースによれば、ソシュールはランゲージュがラングとパ

ロールという相補的な二つの水準を呈することを示した。ラングとパロールは、それぞれが準拠している時間体系の違いによって区別される。ラングは「構造的〔structural〕」であり、「可逆的時間」の領域に属する。パロールは「統計的〔statistique〕」（個別的事例として調査の対象になるといった意味か）であり、「不可逆的時間」の領域に属する。神話は、二つの時間体系の諸特性を組み合わせた一つの時間体系に準拠しており、ラングとパロールよりも高度で複雑な、第三の水準を呈する。

過去のある時点（「世界が創られる前」、「太初時代」、「遠い昔」）に起こったとされるいくつかの出来事が「ひとつの恒常的な構造〔une structure perpétuelle〕」を形作り、過去・現在・未来に関与する。つまり神話は「歴史的でありかつ非歴史的でもある〔à la fois historique et anhistorique〕」。

ひとつの二重構造をなし、第三の水準を呈する神話の最小構成単位である「神話素〔mythème〕」は、通常ラングの構造に入っている音素、形態素、意義素の存在を前提とするのだが、それよりも高次の、「文〔phrase〕」の水準に求められる。

レヴィ＝ストロースの技法の第一段階は、それぞれの神話を分析する際、できるだけ短い文によって、諸々の出来事の継起を「翻訳」する、というものである。（外国語に翻訳するのがきわめて困難な詩と違って、神話はどうに悪く翻訳でも、全世界で、すべての読者にとって、神話として認められる。これは神話の実体が、文体や語り方や統辞法ではなく、神話で語られる「物語〔l'histoire〕」にあるからだという。）各文は、ある主語にある述語が割り当てられることでできている。つまり文＝神話素は、そもそも（主語と述語の）関係としての本質もっている。

それぞれの文は神話中で継起する順番が定まっている以上、パロールの準拠する不可逆的時間のなかにある。レヴィ＝ストロースはこのことを「同時的〔diachronique〕」と言い換えている。また、神話の構成単位は、孤立

した関係（主語と述語の関係からなるひとつひとつの文）ではなく、「諸関係の束〔*paquets de relations*〕」（いくつかの文を一定の条件下でまとめたもの）をなしており、このような束の組み合わせのかたちでのみ、構成単位は「意味機能〔*une fonction signifiante*〕」を獲得する。これは「共時的〔*synchronique*〕」と言い換えられる。この場合の「通時的」、 「共時的」は、ソシユール言語学用語ではそれぞれ「連辞関係〔*rapport syntagmatique*〕」、 「連合関係〔*rapport associatif*〕」に相当すると考えられるが、レヴィ＝ストロースはこの二つの用語を独自の解釈で用いている。

レヴィ＝ストロースはオイディプス神話を例にとり、神話素をいくつかの条件にもとづいて配列する。そしてそれを楽譜になぞらえ、構造主義的な読解を提示する。

第1欄	第2欄	第3欄	第4欄
カドモスはゼウスに奪い去られた姉妹エウローペーを探す		カドモスは竜を殺す	
	スパルタイが互いに殺し合う		ラブラダコス（ラーイオスの父）＝「足が不自由」 (?)
	オイディプスは父ラーイオスを殺す	オイディプスはスピュクスを殺す	ラーイオス（オイディプスの父）＝「左／ぎこちない」 (?)
			オイディプス＝「腫れた足」 (?)
オイディプスは母イオカステと結婚する			
	エテオクレースは兄弟ポリュネイケースを殺す		
アンティゴネーは禁を破り兄弟ポリュネイケースを埋葬する			

上の図は神話の物語における出来事の継起順の背後にある構造を視覚化し配列したものである。たんに神話を語る場合は、行を左から右へ、上から下へ読む。神話を（構造主義的に）理解するには、「通時的順序の半分」すなわち縦の欄にある「関係＝文（主語＋述語）」の順序を度外視し、ひとま

とまりの「束」と捉え、同じ束のなかにある「関係＝文」の共通の特徴と、横に並んだ4つの束の「関係」を読む。これらの束は、レヴィ＝ストロースの用語法によれば、「共時的」であり、「可逆的時間」のなかにある。このように神話的時間は、可逆的でも不可逆的でもあり、共時的でも通時的でもある。

第1欄は「過大評価された親族関係」（親密すぎる血縁者）、第2欄は「過小評価された親族関係」（殺し合う血縁者）、第3欄は「怪物とその退治」、第4欄は父系の人名が「まっすぐ歩くのが困難」を想起させるというそれぞれ共通の特徴を示している。レヴィ＝ストロースはまず第3欄と第4欄の関係について問うことから始める。

竜は「地下に住む怪物〔*monstre chthonien*〕」であり、人間が大地から生まれることができるようになるために退治しなければならない。スピックスは「人間の本性＝生まれ〔*la nature de l'homme*〕」（*nature*の*na-*は「生まれる」を表す）に関する謎で人間の命を奪う。「人間の出自が土であること〔*l'autochtonie de l'homme*〕」にかかわる第一項（竜）が、第二項（スピックス）によって再現されている。これらの怪物は結局人間によって退治される。怪物が減ぼされる以前にすでに人間は存在していたことになる以上、第3欄の共通の特徴は、「人間の出自が土であることの否定〔*la négation de l'autochtonie de l'homme*〕」にある。

第4欄の解釈については、アメリカ原住民の神話が援用される。大地から生まれた人間は、生まれたばかりの時、まだ歩けないか、「ぎこちなく歩く〔*marchant avec gaucherie*〕」者としてしばしば表される。これに鑑みると、第4欄の共通の特徴は、「人間の出自が土であることの存続〔*la persistance de l'autochtonie de l'homme*〕」にある。こうして、第3欄と第4欄の関係は矛盾であり、さらにこの関係は第1欄と第2欄の関係と同じであることがわかる。第1欄、第2欄、第3欄、第4欄の関係は、 $A:B = C:D$ となり、

これは類推アナロジーの関係にあたる。

レヴィ＝ストロースはそこからオイディプス神話の構造主義的解釈を引き出す。

人間の出自が土であることを信じている社会では、人間が人間の男と女の結合から生まれるという事実を、理論上は承認することができない。事実を前に理論はすぐに破綻するわけだが、オイディプス神話は、人間は一者から生まれるか二者から生まれるかという問題と、同じものは同じものから生まれるか別のものから生まれるかという問題とのあいだに橋をかけるような、「一種の論理的道具」を提供する。定式化すれば、血縁の過大評価（一者）：血縁の過小評価（二者）＝出自が土であることを努めて避ける（同じもの）：出自が土であることは避けがたい（別のもの）、となる。「経験は理論を否認するかもしれないが、社会生活と宇宙論〔cosmologie〕とがいずれも同じ矛盾的構造を露呈するかぎりでは、社会生活は宇宙論を立証する。それゆえ、宇宙論は真である。』<sup>31)</sup>つまり、それぞれの「項＝文」自体の真偽が問題なのではなく、また、ある項と別の項が矛盾していることが問題なのでもなく、項と項との関係が、別の項と項との関係と等しい（たとえそれが矛盾関係・対立関係であったとしても）、類似アナロジーの関係にあることが重要なのである。このように関係の類似性を認識することこそが、神話的思考の基礎になっている。

レヴィ＝ストロースの神話解釈にしたがえば、オイディプス神話の最古の形態（ホメーロス）にはなかったモチーフ、たとえばイオカステの自殺やオイディプスの自発的失明は、後代に付加されたものだとしても、神話の構造自体を変えることはない。前者は「自己破壊」の新たな例として第3欄に、後者は別種の「障害」のテーマとして第4欄に配列される。このとき、「足」から「頭」への移行は、同じ構造のなかで、「出自が土であることの否定」から「自己破壊」への移行と「有意義な相関をなしてあ

らわれる〔apparaît en corrélation significative〕<sup>32)</sup> だけである。

この方法論によって構造主義的神話学は「真正の、あるいは原初的な話形の探求〔la recherche de la version authentique ou primitive〕」という従来の神話研究と訣別した。そして、神話をそのヴァリアントの総体からなるものにとらえ、すべてのヴァリアントを同じ資格で考察し、ヴァリアント間に見られる示差的相違が相互に有意味な相関を示していることを確認しながら、最終的には「神話の構造法則〔la loi structurale du mythe〕」に到達しようとする。さらに、構造人類学者の究極の掛金とは、(いわゆる「原始的な」)神話的思考にも科学的思考と同じ論理がはたらいていることを明らかにし、延いては人間精神の普遍性を証明するという壮大なものである。

レヴィ＝ストロースからすれば、ソシユールの神話学は明らかに従来の神話研究に属するものである。ソシユールも伝説・神話のすべてのヴァリアントをくまなく精査するが、上で見たように、むしろ「構造」、「法則」、「ありきたりな不可思議なもの」、当該の時代の社会的通念、年代記作者・詩人の主観的解釈などを徹底的に排して、原初の話形を再構成し、最終的には過去に起こった「現実の出来事」に近接しようとする。筆者が確認したかぎり、ソシユールの手稿でオイディプース伝説を主題的に扱っているものは見あたらないが、もしソシユールがこの伝説を分析するとすれば、まず「怪物退治」を「ありきたりな不可思議なもの」ととらえて、それが挿入される理由を推測するだろう。というのも、ソシユールは、『ニーベルンゲンの歌』の「イストワール竜の物語」をそのように分析しているからである<sup>33)</sup>。ジークフリートのモデルと目されるブルグント王子ジゲリックは、508年に父ジギスムントが西ゴート族との戦争に参加したときにはまだ13歳ほどで、戦場には赴いていなかった。その後522年に暗殺されるまで、ブルグント軍を勝利に導くような武勲はなかったと見られる。この「叙・事・詩・的な意味で話題になる機会もなかった」という「空白」を埋め、英雄に威光をまとわ

せるために、「竜の物語」が「創作」され挿入されたのではないか、ということだ。オイディプースについても、ホメロスの叙事詩のなかでは、スピックスを倒してテーバイを救ったこと、自発的失明、テーバイからの追放は語られておらず、ホメロスの叙述によれば、オイディプースは戦死してテーバイで葬儀が催されるまで王位にあったことになる<sup>34)</sup>。また、ホメロス以後の叙事詩や年代記において、オイディプースの二人の息子と二人の娘は、母イオカステ（あるいはエピカステ）とのあいだにできた子どもではなく、イオカステの死後にエウリュガネイアという別の女性とのあいだの子どもであるとされている。ソシュールの「詩趣喪失」の方法論にしたがえば、歴史上のテーバイ王オイディプースは戦果をあげることなく殺された（おそらく英雄にふさわしくない仕方だ）。叙事詩は亡き王の「空白」を埋め、偉大さを讃えるために、「怪物退治」をして祖国を救う英雄としてオイディプースを描いた。さらに後代、王の悲劇性を演出するために、母との近親相姦と四人の子ども、母=妻の自死を受けての自発的失明、テーバイからの追放の物語が付け足された、ということになるうか。

本論ではソシュールの伝説・神話研究とレヴィ＝ストロースの神話学の相違に焦点を当てた。ソシュールの伝説・神話研究と一般言語学の関係ないし相違については機会をあらためて論じることにする。

#### 付記

本論は、2018-2020年度科学研究費補助金（基盤研究（C）「ソシュールの伝説・神話に関する手稿の文献学的研究」、課題番号18K00480、研究代表者・金澤忠信）による研究成果の一部である。

#### 注

- 1) ソシュールの手稿を参照する際に用いられる「Ms. fr.」は「ジュネーヴ図書館 [Bibliothèque de Genève] 蔵、フランス語手稿（目録番号）」を表す。

« Archives de Saussure » はソシユール家からジュネーヴ図書館に寄託された資料を表す。« f. » はばらばらになっている紙片（に付された番号）を表す。また、以下、引用文において、〈 〉はソシユールによる加筆・修正、[ ]は手稿のなかで空白部分あるいは金澤による注釈、傍点は下線を表す。訳は、特に断り書きがない場合は金澤による。なお、ソシユールの手稿の多くはジュネーヴ図書館によってインターネット上で公開されている（〈[https://archives.bge-geneve.ch/archives/archives/fonds/saussure\\_ferdinand\\_de/n:89/view:all](https://archives.bge-geneve.ch/archives/archives/fonds/saussure_ferdinand_de/n:89/view:all)〉）。

- 2) Cf. 金澤忠信, 「ソシユールの伝説・神話研究と推論的<sup>パラダイム</sup>範例」, 『人文研紀要』第102号, 中央大学人文科学研究所, 2022年, 263-268頁。
- 3) Ms. fr. 3959/11, f. 2; Ferdinand de SAUSSURE, « Légendes et récits d'Europe du Nord : de Sigfrid à Tristan », éd. par Béatrice TURPIN, *Cahier Saussure*, Paris, L'Herne, 2003, p. 424. [フェルディナン・ド・ソシユール, 「北欧の伝説と説話—ジークフリートからトリスタンまで」, ベアトリス・テュルパン編, 『伝説・神話研究』, 金澤忠信訳, 月曜社, 2017年, 119頁。]
- 4) Ms. fr. 3959/11, f. 155; *Cahier Saussure*, p. 426. [『伝説・神話研究』, 123頁。]
- 5) Ms. fr. 3959/3, p. 3; *Cahier Saussure*, p. 400. [『伝説・神話研究』, 81頁。]
- 6) Paul-E. MARTIN, « La destruction d'Avenches dans les Sagas Scandinaves, d'après des traductions et des notes de F. de Saussure », *Anzeiger für schweizerische Geschichte [Indicateur d'histoire suisse]* n° 13 (1915), p. 7.
- 7) Ms. fr. 3958/4, p. 116v; *Cahier Saussure*, p. 381. [『伝説・神話研究』, 52頁。]
- 8) Ms. fr. 3958/6, p. 48v; *Cahier Saussure*, p. 383. [『伝説・神話研究』, 55頁。]
- 9) Ms. fr. 3958/4, p. 63v; *Cahier Saussure*, p. 376. [『伝説・神話研究』, 44頁。]
- 10) Cf. 金澤, 同書, 274-284頁。
- 11) Ms. fr. 3958/7, p. 38v.
- 12) Cf. 金澤忠信, 『ソシユールの政治的言説』, 月曜社, 2017年。
- 13) Ms. fr. 3958/4, p. 10; *Cahier Saussure*, p. 370. [『伝説・神話研究』, 35頁。] Cf. 金澤忠信, 「ソシユールの伝説・神話研究」, 『21世紀のソシユール』, 松澤和宏編, 水声社, 2018年, 158頁。
- 14) Cf. 金澤忠信, 「ソシユールの伝説・神話研究における歴史の概念」, 『香川大学経済論叢』第92巻第3号, 2019年12月, 7-29頁。
- 15) KIM Sungdo, « Le Mythologue Saussure est-il encore Saussure? — Essai d'interprétation sur la mythologie saussurienne », *Linx* 22, 1990, pp. 129-144.
- 16) Claude LÉVI-STRAUSS, *Mythologiques I — Le cru et le cuit*, Paris, Plon, 1964, p. 9. [クロード・レヴィ=ストロース, 『神話論理 I 生のものとは火を通した

- もの』, 早水洋太郎訳, みすず書房, 2006年, 6頁。]
- 17) *Ibid.* [同書, 5頁。]
  - 18) KIM, *op. cit.*, p. 142.
  - 19) LÉVI-STRAUSS, *op. cit.*, p. 346. [『生のもとと火を通したもの』, 471頁。一部改訳。]
  - 20) *Ibid.*, p. 10. [同書, 6頁。]
  - 21) *Ibid.* [同書。]
  - 22) KIM, *op. cit.*, p. 135.
  - 23) *Ibid.*, p. 141.
  - 24) Roman JAKOBSON, *Six leçons sur le son et le sens — préface de Claude LÉVI-STRAUSS*, Paris, Minuit, 1976, p. 7. [ロマーン・ヤーコブソン, 『音と意味についての六章—クロード・レヴィ＝ストロース序』, 花輪光訳, みすず書房, 1977年, 1-2頁。]
  - 25) Nikolai TROUBETZKOY, « La phonologie actuelle », *Psychologie du langage*, Paris, Librairie Félix Alcan, 1933.
  - 26) Claude LÉVI-STRAUSS, « L'analyse structurale en linguistique et en anthropologie », *Anthropologie structurale*, Paris, Plon, 1958 et 1974, p. 46. [クロード・レヴィ＝ストロース, 『構造人類学』, 荒川幾男・生松敬三・川田順造・佐々木明・田島節夫訳, みすず書房, 1972年, 39頁。]
  - 27) Ferdinand de SAUSSURE, *Cours de linguistique générale*, publié par Charles BALLY et Albert SECHEHAYE, avec la collaboration d'Albert RIEDLINGER, Paris, Payot, 1916, pp. 55-95. [フェルディナン・ド・ソシュール, 『新訳 ソシュール一般言語学講義』, 町田健訳, 研究社, 2016年, 67-97頁。]
  - 28) *Ibid.*, p. 159. [同書, 161頁。一部改訳。]
  - 29) LÉVI-STRAUSS, « La structure des mythes », *Anthropologie structurale*. [「神話の構造」, 『構造人類学』。本論では部分的に改訳のうえ引用している。]
  - 30) Cf. Émile BENVENISTE, « Nature du signe linguistique », *Problèmes de linguistique générale, I*, Paris, Gallimard, 1966. [エミール・バンヴェニスト, 「言語記号の性質」, 『一般言語学の諸問題』, 岸本通夫監訳, みすず書房, 1983年。]
  - 31) LÉVI-STRAUSS, *op. cit.*, p. 248. [『構造人類学』, 240頁。一部改訳。]
  - 32) *Ibid.*, p. 249. [同書。]
  - 33) Ms. fr. 3958/4, p. 116; *Cahier Saussure*, p. 381. [『伝説・神話研究』, 51-52頁。]
  - 34) Cf. ソボクレス, 『オイディプス王』, 藤沢令夫訳, 岩波文庫, 1967年, 120-121頁 (訳者による「解説」)。高津春繁, 『ギリシア・ローマ神話辞典』, 岩波書店, 1960年。

### 参考文献

- 石川栄作 (1992), 『『ニーベルンゲンの歌』—構成と内容』, 郁文堂。
- (2001), 『『ニーベルンゲンの歌』を読む』, 講談社学術文庫。
- (2004), 『ジークフリート伝説—ワグナー『指環』の源流』, 講談社学術文庫。
- 〔訳〕(2011), 『ニーベルンゲンの歌』(前編・後編), ちくま文庫。
- 金澤忠信 (2017), 『ソシユールの政治的言説』, 月曜社。
- (2017), 「凡庸さとありきたりなもの」, 『ユリイカ』「総特集・蓮實重彦」10月臨時増刊号, 青土社, 355-369頁。
- (2018), 「ソシユールの伝説・神話研究」, 『21世紀のソシユール』, 松澤和宏編, 水声社, 155-170頁。
- (2019), 「ソシユールの伝説・神話研究における歴史の概念」, 『香川大学経済論叢』第92巻第3号, 2019年12月, 7-29頁。
- (2021), 「歴史と伝説—ソシユールの伝説・神話研究」, 『フランス文学』第33号, 日本フランス語フランス文学会中国・四国支部編, 2021年6月, 1-15頁。
- (2022), 「ソシユールの伝説・神話研究と推論的範例」, 『人文研紀要』第102号, 中央大学人文科学研究所, 263-289頁。
- 高津春繁 (1960), 『ギリシア・ローマ神話辞典』, 岩波書店。
- 佐藤彰一 (2000), 『ポスト・ローマ期フランク史の研究』, 岩波オンデマンドボックス。
- (2004), 『歴史書を読む—『歴史十書』のテキスト科学』, 山川出版社。
- (2021), 『フランク史 I—クローヴィス以前』, 名古屋大学出版会。
- (2022), 『フランク史 II—メロヴィング朝の模索』, 名古屋大学出版会。
- 佐藤輝夫〔訳〕(1953), ベディエ編, 『トリスタン・イゾー物語』, 岩波文庫。
- (1981), 『トリスタン伝説—流布本系の研究』, 中央公論社。
- 菅原邦城〔訳・解説〕(1979), 『ゲルマン北欧の英雄伝説—ヴォルスンガ・サガ』, 東海大学出版会。
- 浜崎長寿・松村国隆・大澤慶子〔編〕(1981), 『ニーベルンゲンの歌 抜粋・訳注』, 大学書林。
- 藤沢令夫〔訳〕(1967), ソポクレス, 『オイディプス王』, 岩波文庫。
- 山田広昭 (2018), 「精神分析批評(1)—テキストの無意識」, 丹治愛・山田広昭編, 『文学批評への招待』(放送大学教材), NHK出版。
- 渡邊徳明 (2011), 「『ニーベルンゲンの歌』の舞台裏—エツェル王の二人の后とベルネのディエトリーヒ」, 『英雄史とは何か』, 中央大学人文科学研究所編

- (研究叢書55), 中央大学出版部。
- ARRIVÉ, Michel (1986), *Linguistique et psychanalyse*, Paris, Méridiens.
- (2001), « La sémiologie saussurienne entre le CLG et la recherche sur la légende », *Linx* 44, pp. 13-27. <<http://linx.revues.org/1015>>
- (2007), *À la recherche de Ferdinand de Saussure*, Paris, PUF.
- (2012), « De la lettre à la littérature : un trajet saussurien », *Linguiste et littérature 1. Saussure. En quoi Saussure peut-il nous aider à Penser la littérature ?*, Presses de l'Université de Pau et des Pays de l'Adour, pp. 33-50. <halshs-00817830> <<https://halshs.archives-ouvertes.fr/halshs-00817830/document>>
- (2016), *Saussure retrouvé*, Paris, Classiques Garnier.
- AVALLE, D'Arco Silvio (1972), « Dai sistemi di segni alle nebulose di dementi », *Strumenti critici 19*, pp. 229-242.
- (1973a), « La sémiologie de la narrativité chez Saussure », *Essai de la théorie du texte*, Paris, Galilée, pp. 17-49.
- (1973b), *L'ontologia del segno in Saussure*, Turin, Giannichelli.
- BENVENISTE, Émile (1966), « Nature du signe linguistique », *Problèmes de linguistique générale, I*, Paris, Gallimard. [エミール・バンヴェニスト, 「言語記号の性質」, 『一般言語学の諸問題』, 岸本通夫監訳, みすず書房, 1983年]
- CALVET, Louis-Jean (1975), *Pour et contre Saussure*, Paris, Payot.
- DE MAURO, Tullio (1972), « Notes biographiques et critiques sur F. de Saussure », tr. fr. Louis-Jean CALVET, *Cours de linguistique générale*, Paris, Payot. [トウリオ・デ・マウロ, 『「ソシュール一般言語学講義」校注』, 山内貴美夫訳, 而立書房, 1976年]
- DOSSE, François (1991), *Histoire du structuralisme I — Le champ du signe 1945-1966*, Paris, La Découverte. [フランソワ・ドゥッス, 『構造主義の歴史 [上巻] — 記号の沃野 1945~1966』, 清水正・佐山一訳, 国文社, 1999年]
- (1992), *Histoire du structuralisme II — Le chant du cygne 1967 à nos jours*, Paris, La Découverte. [フランソワ・ドゥッス, 『構造主義の歴史 [下巻] — 白鳥の歌 1967~1992』, 中澤紀雄訳, 国文社, 1999年]
- ENGLER, Rudolf (1974), « Sémiologies saussuriennes — 1. De l'existence du signe », *Cahiers Ferdinand de Saussure 29*, Genève, Droz, pp. 45-73.
- (1980), « Sémiologies saussuriennes — 2. Le canevas », *Cahiers Ferdinand de Saussure 34*, Genève, Droz, pp. 3-16.
- FREUD, Sigmund (1914), « Der Mose des Michelangelo ». [ジークムント・フロイ

- ト, 「ミケランジェロのモーゼ像」, 高橋義孝訳, 『フロイト著作集 3』, 人文書店, 高橋義孝他訳, 人文書院, 1969年]
- GINZBURG, Carlo (1986), *Miti Emblemi Spie — Morfologia e storia*, Torino, Einaudi. [カルロ・ギンズブルグ, 『神話・寓意・徴候』, 竹山博英訳, せりか書房, 1988年]
- GODEL, Robert (1957), *Les sources manuscrites du Cours de linguistique générale*, Genève, Droz.
- (1960), « Inventaire des manuscrits de F. de Saussure », *Cahiers Ferdinand de Saussure* 17, Genève, Droz, pp. 5-11.
- GREGORIVS EPISCOPVS TVRONENSIS [Grégoire de Tours], *HISTORIA FRANCORVM*. [トゥールのグレゴリウス, 『フランク史——〇巻の歴史』, 杉本正俊訳, 新評論, 2007年]
- KIM Sungdo (1990), « Le Mythologie Saussure est-il encore Saussure ? — Essai d'interprétation sur la mythologie saussurienne », *Linx* 22, pp. 129-144. <[http://www.persee.fr/web/revues/home/prescript/article/linx\\_0246-8743\\_1990\\_num\\_22\\_1\\_1149](http://www.persee.fr/web/revues/home/prescript/article/linx_0246-8743_1990_num_22_1_1149)>
- (1995), « La mythologie saussurienne : une ouverture sémiologique », *Linx* 7, pp. 293-300. <<http://linx.revues.org/1171>>
- JAKOBSON, Roman (1976), *Six leçons sur le son et le sens — préface de Claude LÉVI-STRAUSS*, Paris, Minuit. [ロマン・ヤーコブソン, 『音と意味についての六章——クロード・レヴィ＝ストロース序』, 花輪光訳, みすず書房, 1977年]
- LARUE-TONDEUR, Josette (2010), « Saussure et le personnage mythologique », *Saussure et la psychanalyse*, Aug 2010, Cerisy-la-Salle (50), France. <[halshs-00512239](http://halshs-00512239)> <<https://hal.archives-ouvertes.fr/halshs-00512239/document>>
- LE JEAN, Régine (2006), *Les Mérovingiens* (Collection QUE SAIT-JE?), Paris, PUF. [レジーヌ・ル・ジャン, 『メロヴィング朝』, 加納修訳, 白水社文庫クセジュ, 2009年]
- LÉVI-STRAUSS, Claude (1958, 1974) *Anthropologie structurale*, Paris, Plon. [クロード・レヴィ＝ストロース, 『構造人類学』, 荒川幾男・生松敬三・川田順造・佐々木明・田島節夫訳, みすず書房, 1972年]
- (1964), *Mythologiques I — Le cru et le cuit*, Paris, Plon. [クロード・レヴィ＝ストロース, 『神話論理 I 生のものと火を通したもの』, 早水洋太郎訳, みすず書房, 2006年]
- MARCELLO-NIZIA, Christiane [éd.] (1995), *Tristan et Iseult, Les premières versions européennes*, Paris, Gallimard (La Pléiade).

- MARTIN, Paul-E. (1915), « La destruction d'Avenches dans les Sagas Scandinaves, d'après des traductions et des notes de F. de Saussure », *Anzeiger für schweizerische Geschichte* [Indicateur d'histoire suisse] n° 13.
- MONOD, Gabriel (1872-1885), *Études critiques sur les sources de l'histoire mérovingienne*, 2 vol., Paris, A. Franck.
- (1876), « Du progrès des études historiques en France depuis le XVI<sup>e</sup> siècle », *Revue historique*, tome I, janvier-juin.
- MUSSOT-GOULARD, René (1997), *Clovis* (Collection QUE SAIT-JE?), Paris, PUF  
〔ルネ・ミュソ=グラール, 『クローヴィス』, 加納修訳, 白水社文庫クセジュ, 2000年〕
- PIERSSENS, Michel (1974), « La Tour de Babil — Sur quelques aventures linguistiques », *Les deux Saussure (Recherches 16)*, CERFI, Fontenay-sous-Bois, pp. 65-89.
- PINHEIRO, Clemlton Lopes (2014), « Les études de Saussure sur les légendes: un rapide parcours à travers quelques interprétations », *Congrès Mondial de Linguistique Française — CMLF 2014, SHS Web of Conferences*, pp. 479-490.  
〈[http://www.shs-conferences.org/articles/shsconf/pdf/2014/05/shsconf\\_cmlf14\\_01118.pdf](http://www.shs-conferences.org/articles/shsconf/pdf/2014/05/shsconf_cmlf14_01118.pdf)〉
- PROSDOCIMI, Aldo (1983), « Sul Saussure delle leggende germaniche », *Cahiers Ferdinand de Saussure* 37, Genève, Droz, pp. 35-106.
- SAUSSURE, Ferdinand de (1879 [1878]), *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes*, Leipzig, Teubner.
- (1916), *Cours de linguistique générale*, publié par Charles BALLY et Albert SECHEHAYE, avec la collaboration d'Albert RIEDLINGER, Paris, Payot. [フェルディナン・ド・ソシュール, 『一般言語学講義』(改版), 小林英夫訳, 岩波書店, 1972年。『新訳ソシュール一般言語学講義』, 町田健訳, 研究社, 2016年]
- (1922), *Recueil des publications scientifiques de Ferdinand de Saussure*, publié par Charles BALLY et Léopold GAUTIER, Genève, Sonor; repr., Genève, Slatkine, 1970.
- (1967-1968), *Cours de linguistique générale*, édition critique par Rudolf ENGLER, tome 1, Wiesbaden, Otto Harrassowitz.
- (1974), *Cours de linguistique générale*, édition critique par Rudolf ENGLER, tome 2, Wiesbaden, Otto Harrassowitz.
- (2002), *Écrits de linguistique générale*, établis et édités par Simon Bouquet et Rudolf Engler avec la collaboration d'Antoinette Weil, Paris, Gallimard. [フェル

- ディナン・ド・ソシュール, 『「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』』, 松澤和宏訳, 岩波書店, 2013年]
- (2003), « Légendes et récits d'Europe du Nord : de Sigfrid à Tristan », présentation et édition par Béatrice TÜRPN, *Saussure*, Paris, L'Herne, 2003. [フェルディナン・ド・ソシュール, 「北欧の伝説と説話—ジークフリートからトリスタンまで」, ベアトリス・テュルパン編, 『伝説・神話研究』, 金澤忠信訳, 月曜社, 2017年]
- (2011), *Science du langage — De la double essence du langage*, éditions des *Écrits de linguistique générale*, établie par René AMACKER, Genève, Droz.
- STAROBINSKI, Jean (1971), *Les mots sous les mots — Les anagrammes de Ferdinand de Saussure*, Paris, Gallimard. [ジャン・スタロバンスキー, 『ソシュールのアナグラム』, 金澤忠信訳, 水声社, 2006年]
- TESTENOIRE, Pierre-Yves (2013), *Ferdinand de Saussure à la recherche des anagrammes*, Lambert-Lucas.
- THIERRY, Amédée (1856), *Histoire d'Attila et de ses successeurs, jusqu'à l'établissement des Hongrois en Europe*, tome I-II, Paris, Didier.
- THIERRY, Augustin (1840), *Récits des Temps Mérovingiens*, Paris, Libraire Garnier Frères. [オーギュスタン・ティエリ, 『メロヴィング王朝史話』(上・下), 小島輝正訳, 岩波文庫, 1992年]
- TÜRPN, Béatrice (2003), « Légendes — Mythes — Histoire. La circulation des signes », *Cahier Saussure*, Paris, L'Herne, pp. 307-316.

